

3-2 優占度調査結果

優占度調査では33種の鳥類が記録された。今回は調査時期が、鳥類の繁殖期をはずれた10月、11月になったこと、強風、雨等の悪天のため、記録種数は少なかった。

知床半島全体については多くの鳥類調査がおこなわれており、それぞれの生息環境ごとの鳥類群集の特徴が明らかになりつつある。しかし、ルシャ・テッパンベツ地域に限った調査はおこなわれておらず、半島内他地域との生息鳥類の差は明らかではない。

森林性鳥類・草原性鳥類

海岸林道、テッパンベツ林道のラインセンサスにより記録した。17種が記録された。観察個体数の多かった種としてはハシボソガラス、ハシブトガラス、アオジ、エナガがあげられる。

カラス類2種は、留鳥と考えられ、魚・動物死体等を採食するため海岸に多い種である。調査時は、サケ、マスの遡上時期に当たっており、産卵後の死体が河岸、河口に多く見られた。それらをカラス類がついばむのも観察された。この時期には、サケ・マスの死体を採食するため、特に河岸や河口部に集中していた可能性が考えられる。

アオジは10月調査時に林縁、海岸草原や灌木林で多く観察された。アオジは全道の森林、原野などにごく普通に繁殖する種であり、知床半島でも個体数が多い。知床半島における既存の調査でも、低山帯では10%以上の高い優占度を示すことが多い（たとえば中川 1981・文献 31）。また、道東では10月上～中旬に、非常に多数のアオジが南への渡りの途中に通過することが知られている。今回の調査時はその時期に当たっていたため、観察数が多かったと考えられる。

エナガは群で移動しており、センサス時この群に遭遇したので多く観察された。エナガおよびハシブトガラ、シジュウカラ、ゴジュウカラ等のカラ類は森林性の留鳥として、知床半島全域の森林で広く観察されている。

河川性鳥類

ヤマセミ、キセキレイ、カワガラスが観察された。

ヤマセミは半島基部の規模の大きな河川にのみ繁殖し、半島部には少ないとされる（中川・1988、文献 60）。今回の調査で記録されたのは、渡り途中のものと考えられる。

カワガラスはルシャ川、テッパンベツ川、本別川のいずれでも観察された。知床半島の河川ではごく普通に棲息する種である。

キセキレイはルシャ川、テッパンベツ川で観察された。カワガラスと同様、知床半島の河川に普通に生息するものと考えられる。

海鳥類

知床沿岸は海鳥類の豊富な地域である。中川によれば、海鳥類は10月に姿を見せ始め、11月に増加するとされる。ルシャ沖の記録として中川は、オオハム、ミミカイツブリ、アカエリカイツブリ、ヒメウ、ウミスズメ、シノリガモ、ヒロードキンクロ、ウミアイサ、コオリガモ、オオセグロカモメ、ミツユビカ

モメ、セグロカモメを記録している。

今回の調査では、シロエリオオハム（オオハムの可能性もあり）、ウミウ、ヒメウ、シノリガモ、ホオジロガモ、ミコアイサ、ウミアイサ、ユリカモメ、セグロカモメ、オオセグロカモメ、シロカモメ、ウミネコ、ミツユビカモメの13種が観察された。定点センサスによれば、ウミアイサ、オオセグロカモメ、ミツユビカモメの個体数が多かった。ウミアイサは11月には500羽を超える群が沖合に見られた。

オオセグロカモメが、サケ・マスの死体を採食するのが見られた。またシノリガモはルシャ川河口の湛水部で盛んに潜水を繰り返す行動が観察された。さけますの卵を採食する行動と考えられる。

オジロワシ

10月には2羽（若鳥）、11月には3羽（成鳥2、若鳥1）が河口付近で見られた。

表3 鳥類調査結果（海岸林道）

調査地：海岸林道（ラインセンサス）

調査月日：1995年10月18

調査月日：1995年11月19

時間：

距離：2.45 km

No.	種名	10月			11月		
		個体数	優占度	N/km	個体数	優占度	N/km
1	シリカモ				1	11.1	0.41
2	トビ	1	0.7	0.41			
3	オジロワシ	1	0.7	0.41			
4	ユリカモメ	5	3.7	2.04	3	33.3	1.22
5	セグロカモメ	19	14.2	7.76			
6	オオセグロカモメ	25	18.7	10.20			
7	ウミネコ	1	0.7	0.41			
8	アマツバメ				2	22.2	0.82
9	アカゲラ	2	1.5	0.82			
10	コゲラ	3	2.2	1.22			
11	キセキレイ	1	0.7	0.41			
12	タヒバリ	8	6.0	3.27			
13	カワガラス	1	0.7	0.41	1	11.1	0.41
14	エナガ	10	7.5	4.08			
15	ハシブトガラ	12	9.0	4.90			
16	シジュウカラ	4	3.0	1.63			
17	アオジ	15	11.2	6.12			
18	ハシボソガラス	26	19.4	10.61			
19	ハシブトガラ				2	22.2	0.41
	（合計19種）	134	100.0	54.69	9	100.0	3.27

表4 鳥類調査結果（テッパンベツ川右岸林道）

調査地：テッパンベツ川右岸林道（ラインセンサス）

調査月日：1995年10月18日

調査月日：1995年11月19日

時間：

距離：0.8 km

No	種名	10月			11月		
		個体数	優占度	N/km	個体数	優占度	N/km
1	オジロワシ	1	3.3	1.25			
2	ユリカモメ				1	7.7	1.25
3	セグロカモメ				2	15.4	2.5
4	オオセグロカモメ				2	15.4	2.5
5	ヤマセミ				+		
6	コケラ	1	3.3	1.25			
7	カワガラス	2	6.7	2.5	2	15.4	2.5
8	ミソサザイ	2	6.7	2.5			
9	ウグイス	1	3.3	1.25			
10	エナガ	5	16.7	6.25			
11	ハシブトガラス	2	6.7	2.5			
12	シジュウカラ	1	3.3	1.25			
13	ゴジュウカラ	1	3.3	1.25			
14	アオジ	11	36.7	13.75			
15	クロジ	1	3.3	1.25			
16	カケス	1	3.3	1.25			
17	ハシボソガラス	1	3.3	1.25	3	23.1	3.75
18	ハシブトガラス				3	23.1	3.75
	（合計18種）	30	100.0	37.5	13	100.0	16.25

表5 鳥類調査結果（ルシャ河口）

調査地：ルシャ河口（定点センサス）

調査月日：1995年10月18 日

調査月日：1995年11月19 日

時間：60分間

No.	種名	10月			11月		
		個体数	優占度	N/km	個体数	優占度	N/km
1	*アヒ'類sp.	70	14.5				
2	ウミウ	5	1.0				
3	ヒメウ	1	0.2		1	0.0	
4	シノリカ'モ	12	2.5		13	1.2	
5	ホオジ'ロカ'モ	2	0.4		6	0.5	
6	ミコアイサ				22	2.0	
7	ウミアイサ	120	24.8		505+	46.1	
8	トビ'	1	0.2				
9	オジ'ロワシ	2	0.4				
10	ユリカモメ	24	5.0		10	0.9	
11	セグ'ロカモメ	21	4.3		64	5.8	
12	オオセグ'ロカモメ	126	26.0		110	10.0	
13	シロカモメ	1	0.2				
14	ウミネコ	15	3.1		84	7.7	
15	ミツユビ'カモメ	62	12.8		280	25.6	
16	コゲ'ラ	1	0.2				
17	カケス	1	0.2				
18	ハシボ'ソカ'ラス	18	3.7				
19	ハシブ'トガ'ラス	2	0.4				
	（合計 19種）	484	100.0		1095	100.0	

*アヒ'類sp.：シロエリオオハムの可能性が高い

表6 現地調査出現種一覧

ルシャ・テッパンベツ現地調査出現鳥類一覧

No.	種名	海岸林道		テッパンベツ		ルシャ河口	
		10月	11月	10月	11月	10月	11月
1	シロエリオオハム					+	
2	ウミウ					+	
3	ヒメウ					+	+
4	シロリガモ		+			+	+
5	ホオジロガモ					+	+
6	ミコアイサ						+
7	ウミアイサ					+	+
8	トビ	+				+	
9	オジロワシ	+		+		+	
10	ユリカモメ	+	+		+	+	+
11	セグロカモメ	+			+	+	+
12	オオセグロカモメ	+			+	+	+
13	シロカモメ					+	
14	ウミネコ	+				+	+
15	ミツユビカモメ					+	+
16	アマツハメ		+				
17	ヤマセミ				+		
18	アカゲラ	+					
19	コゲラ	+		+		+	
20	キセキレイ	+					
21	タヒバリ	+					
22	ミソサザイ			+			
23	カワガラス	+	+	+	+		
24	ウグイス			+			
25	エナガ	+		+			
26	ハシブトガラ	+		+			
27	シジュウカラ	+		+			
28	ゴジュウカラ			+			
29	アオジ	+		+			
30	クロジ			+			
31	カケス			+		+	
32	ハシボソガラス	+		+	+	+	
33	ハシブトガラス		+		+	+	
	合計	16	5	13	7	18	10

2. 大型猛禽類の生息実態の把握

地域の自然度を評価する上での重要な環境指標動物である、大型猛禽類の生活実態の把握を試みた。今回は次の3項目にポイントを絞り、調査を実施した。

①地域定着性が高く、特に河川域を重要な採餌環境としている繁殖鳥、シマフクロウの生息実態

シマフクロウ (*Ketupa blakistoni*) は国内希少野生動植物種に指定されている大型の魚食性のフクロウで、地域定着性が高く大木の樹洞で営巣する。近年、河川改修や河口におけるウライ (サケマス捕獲用の梁) の設置などによる餌環境の悪化、森林伐採などによる営巣環境の悪化などによりその生息数は激減し、現在確認されている繁殖つがい数は僅か20余りにすぎない。

今回、シマフクロウの調査は調査区域内を流れる3河川流域の踏査と、河口付近における鳴声の聞き取り調査 (夜間)、そして区域内で操業中の漁民 (第19号番屋) への情報の聞き込みにより行なった。

8月8日に周辺地域を撮影フィールドにしているカメラマンに当日サシルイ川の最上流堰で拾得したというシマフクロウの羽毛の提供があった。検証の結果、少なくとも当年の換羽期に抜け落ちた成鳥の初列風切り羽であり、同種の当河川における生息が確認された。ルシャ川では以前第2砂防堰付近の河川敷でシマフクロウの足跡が確認されたことがあり (山本 私信)、半島羅臼側の河川と同様にこの時期河口域での活発な採餌行動があることが示唆されている。また、地域住民 (第19号番屋) に対して実施した聞き取り調査でも、11月22日に番屋裏の樹林帯で鳴いていたとの情報を得たことから海岸線付近にまで飛来してきている可能性も高い (鳴き交わしであるか、また、ルシャ川にて生息確認した個体と同一であるかなどは不明)。

調査区域内では砂防堰のある河川も含めて、秋冬期の重要な餌動物であろうサケマスの自然遡上が上流域まで観察された。しかしながら魚類密度は明らかに堰直下に形成されたプールで高く、また被捕食率が最も高いと思われる衰弱した魚や死体も周辺の浅瀬に集中しており、捕獲やスカベンジングの容易さからこの魚の遡上に伴いシマフクロウを含む魚食性の大型猛禽類がピンポイント的に集中する傾向があると思われる。この現象は本来河川流域に沿ってテリトリーを形成するシマフクロウにとって、異家族群間での採餌場の共有による占有領域の崩壊を促す結果となり、良い傾向とは言い難い。個体群をつがい単位で分散させ、さらに幼鳥の自然分散の不全による親つがいを中心とした同心円型占有領域の形成を阻止することは、血縁の濃縮に歯止めをかけるための常套手段である。

調査区域の主要河川すべてに合計6個の巣箱が設置されているが、ここ数年来 (平成5年を最後に) これらの利用は認められておらず、また天然樹洞による繁殖の有無や場所の特定がなされていない。また、個体識別や行動圏、地域内総個体数も十分に調査されておらず、調査区域内の2つ以上の河川にまたがって同一つがいの占有領域が形成されている可能性さえある。特にルシャ川とテッパンベツ川の中流河口域は近接しており、鳥が尾根越えを交流している可能性は高い。11月22日、23日にはボンシュンカリ川とルシャ川で巣箱の新設と掛け替え作業が行なわれたが、個体の情報は得られなかった。

前述したように調査地域におけるシマフクロウに関する信頼性の高い情報は非常に少ない。鳴き交わしの同時聞き取り調査などによる繁殖つがい数の把握、巣立ち後の幼鳥の確認等による繁殖状況の把握、そして天然営巣樹洞の搜索などによる営巣環境の基礎調査 (巣箱設置の必要性や有意義な設置場所を判断するために必須資料) は本希少種を保護管理するにあたっての急務である。

②オオワシ、オジロワシの遡上サケマスに対する餌的依存性（飛来数とサケマスの遡上量との有意関連性の検証）

（方法）調査区域内の主要河川であるテッパンベツ川、ルシャ川、ボンシュンカリ川の河口付近が広く見渡せる高台に観察地点を各1地点ずつ設け、双眼鏡及びプロミナーを用いて見通し範囲内に出現したオオワシ、オジロワシの行動を定点観測し記録する。また、隣接する観測地点の視野端を部分的に共有させることによって、少なくとも海岸線付近に出現した個体は観察者が無線で連絡を取り合うことによって連続して追跡観察できる体制をとった。調査時間は基本的に猛禽類の飛翔に重要な上昇気流が発生しやすいとされる午前10時から午後2時迄とした。

（結果）結果は（表7）のとおりである。

（表7）調査区域内で観察されたオオワシ、オジロワシの個体数の月別推移（同時確認、羽色、換羽状況などによる最小見積り数）

	オオワシ	合 計	オジロワシ	合 計
8 月	幼鳥 1	1	幼鳥 1、成鳥 1	2
9 月	未確認	0	幼鳥 3、成鳥 1	4
10 月	幼鳥 1	1	幼鳥 9、成鳥 1	10
11 月	幼鳥 1、成鳥 2	3	幼鳥 1、成鳥 1	2

オオワシ、オジロワシの渡来時期や越冬期の定着個体数は、一般に海水（流氷）の分布や規模、着岸時期などによって変動し、さらに餌として重要なスケソウダラの漁獲量にも大きく左右されるとされている。しかしながら、越冬個体数が最大となる1・2月の集中調査（一斉カウントなど）は各地で行なわれているものの、個体数の季節的推移を渡来早期から定点観測により緻密に記録した例や、ワシの到来よりも一足先にピークを迎える遡上サケマスへの餌的依存性などの基礎調査を実施した記録もほとんどない。

今回の調査では、少なくとも調査地内の河口・沿岸帯に出現したワシの総個体数はほぼ正確に把握できたと思われるが、最も渡来数が多いとされる12月以降期に調査区域内に立ち入ることが交通事情等により困難であったため、地域渡来数の時間的（季節的）分布を解明するには至らなかった。しかしながら、カラフトマスの遡上量の激増とほぼ期を同じくして、オジロワシの個体数が河口付近に集中し、特に採餌効率が比較的悪いと思われる幼鳥の絶好のハンティングエリアとなっている（表7）からも明かである。実際に、幼鳥（当歳齢）が河口付近の浅瀬からカラフトマスを捕食する場面や完全に打ち上げられたマスを若鳥が採餌（魚の傷み具合からスカベンジングであると思われる）している光景を観察することができた。このことから、少なくともオジロワシの若齢鳥にとって、容易に捕食可能な遡上魚はこの時期の重要な餌資源となっていることは明白である。オオワシについては今回採餌行動を観察する機会がなかったが、カムチャッカ半島ではオジロワシやイヌワシとともに越冬個体が遡上中のサケマスを活発に捕食している光景をこの時期日常的に観察できるという（E. G. ロブコフ 私信）から、早期に渡来したオオワシが同様の行動をとっている可能性もある。

調査区域内で観察されたオオワシとオジロワシは明らかに天候によって半島のオホーツク海側と根室海側を尾根越えにより行き来していることが推測される。10月、11月の調査で北および南西の強風雪がそれぞれ半日ずつ吹いた日があったが、ワシの個体数は明らかに風を避けるように変動した。また、ルシャ川とテッパンベツ川を分ける尾根の鞍部とボンシュンカリ川河口部東側斜面にダケカンバの大木があり、ワシの絶好のねぐら（パーチング・ツリー）

になっている。両種のワシはこの二本の樹を含めて数本のみを高頻度で使用し、逆にこのような場所が意外にも少ないことがわかった。これらの樹種はいずれも枝振りの良い（なおかつ枝間隔の広い）ダケカンバかトドマツの大木で、日当たりの良い尾根筋から樹高分ほど下ったところに位置していた。

知床半島で繁殖するオジロワシは10つがい前後とされ、北海道最大の繁殖地となっている。今回の調査でも、同じ巣から巣立ったと思われる当歳齢の幼鳥2羽と親鳥がテッパンベツ川河口付近で頻繁に観察され、付近に営巣地があることが示唆された。一般に知床半島の営巣地は海岸から500メートル以内にあるものが多いとされており、さらなる調査によりその場所を特定しておく必要がある。

また、前述したように、8月の調査においてオオワシの幼鳥が確認されており、同種の半島内での繁殖の可能性もあることから今後5、6月の営巣期を含めた確認調査が必要とされる。

③調査地周辺域で繁殖していると思われる、クマタカの生息実態

クマタカはインド、スリランカ、中国南半部、日本などの山岳部で繁殖する留鳥である。日本では北海道から九州までの山地に生息しているが、その生活形態は未だ不明な部分も多くその地域的差異も不明である。主に針葉樹に営巣し、クラッチサイズ（一腹卵数）は1である。個体数は多くなく、国内希少野生動植物種に指定されている。本州以南のクマタカの垂直分布は主に山頂付近まで樹林帯に覆われるいわゆる低山地帯が多く、その生活形態もヘビ、鳥類、小型哺乳類を主食とするなどいわゆる「山ワシ」として適応している。北海道にもクマタカが生息していることは明らかであったが、動植物の分布標高が本州のそれとは著しく異なる知床半島における生態はほとんど解明されていない。

今回の調査で、ルシャ・テッパンベツ川間の尾根にクマタカ1つがいが生息していることが明らかとなった。9月下旬の調査では成鳥1羽がオジロワシの幼鳥にモビングをかけ、下方から腹部を蹴りあげる荒々しい光景が観察された。また、11月には雌雄成鳥が並列して尾根上を旋回飛翔するなど、不完全ではあるがディスプレイ様の行動を見せるなど付近にて繁殖していることを強く示唆する行動を目撃した。オジロワシの繁殖地に隣接した場所で、互いに対する排斥行動を分析するなどしてテリトリーの立体構造を明かにすることは、両種の生息個体数を推測する上で不可欠である。

前述した大型猛禽類とはかなり異なった餌および営巣環境を必要とし、森林生態系の指標動物として重要であることから、本調査地を含む道内におけるクマタカの生息実態を早期に明らかにする必要がある。